



## 卷頭言

石田, 憲治

---

**(Citation)**

海事博物館研究年報, 34

**(Issue Date)**

2006-03

**(Resource Type)**

other

**(Version)**

Version of Record

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005646>



## 巻頭言

海事博物館館長 石田憲治

小学5年生の夏、祖父と一緒に東京上野の国立科学博物館に行った時、館の入り口にある大きなシロナガスクジラの骨格標本を見てその「巨大」さにびっくりした記憶があります。そして平成18年の夏、上野にある東京芸術大学で開催された国立大学博物館協議会主催の展示会を見に行った帰り、科学博物館の側を歩いていると、鯨の骨格標本が目に入り、しばし立ち止まって48年前のものと同じなのかと眺めました。今回は「巨大」とは感じませんでした、時の流れを痛感しました。その時、次回はいつになるかわかりませんが、孫を連れて一緒に鯨を見てから博物館の中に入りたと思いました。

「博物館」は常に同じところで、時間の経過に関係なく存在するものと思います。中の所蔵品の基本は変わらず、しかし絶えず変化してゆくものでしょう。一度訪ねた人が次も来てみたいと思える空間だと考えます。「動物園」は生物の博物館です、年代を超えて最初に訪れた記憶に上乘せする体験を求めて訪ねるところだと思っています。

深江の海事博物館には、最近小学生から老人大学までの訪問者が増えております。年を重ねた訪問者は資料の由来や、用途を確認したいと考えながら館内を見ているのでしょうか。子供達はどうのような視点、観点から資料を見、また説明を聞いているのでしょうか。一度、年代を超えて、博物館の印象や私達が提供している案内などについて、討論会を開いてみたいものです。

中でも、子供達には海事博物館に来て船・海・歴史に触れ将来海事の社会で活躍してみたい、成長して深江の学生になりたい、または子供を連れて、そして孫と一緒に訪ねたいと思う夢のある「博物館」でありたいと思っています。